

第46回環境気象学コロキウム

下記の通り、第46回環境気象学コロキウムを開催致します。今回の話題提供者は、気象庁数値予報班長、数値予報モデル開発推進官、アジア太平洋気象防災センター所長を歴任された気象研究所の永戸久喜 研究調整官です。学部1年生から大学院生まで気象学・気象予報士に興味をお持ちの方は、ぜひご参加ください。 **入退室自由です !!**



日時: 2020年11月11日(水) 17:50~

会場: オンライン (右QRコードにより事前登録をお願いします)

講師: 永戸久喜 氏 (気象庁 気象研究所 研究調整官,
前予報部予報課アジア太平洋気象防災センター所長)

演題: 気象庁の台風解析・予報とその最新技術について

概要: 台風は、毎年のようにわが国に襲来し、それに伴う大雨・暴風・高潮・波浪等によって、非常に大きい災害をもたらすことがあります。最近では、千葉県を中心に暴風による家屋の損壊及び送電塔・電柱の倒壊・損傷による広範囲且つ長期間の停電等の甚大な災害をもたらした令和元年房総半島台風(台風第15号)や、東日本の非常に広い範囲に大雨による河川の氾濫や土砂災害・浸水害等を引き起こし、甚大な人的被害やライフラインへの被害をもたらした令和元年東日本台風(台風第19号)等が記憶に新しいところです。気象庁は、このように、多大な人的・経済的被害をもたらす台風による災害に対して、早期に確実に備え、災害の軽減に資する各種情報の提供を行っています。それに加え、気象庁は、国際的な枠組みの中で、北西太平洋と南シナ海の台風の監視・予報を行う責任を担っており、責任領域内の国や地域の台風予報及び気象防災を支援するため、情報の提供、技術支援、人材の育成等も行っています。

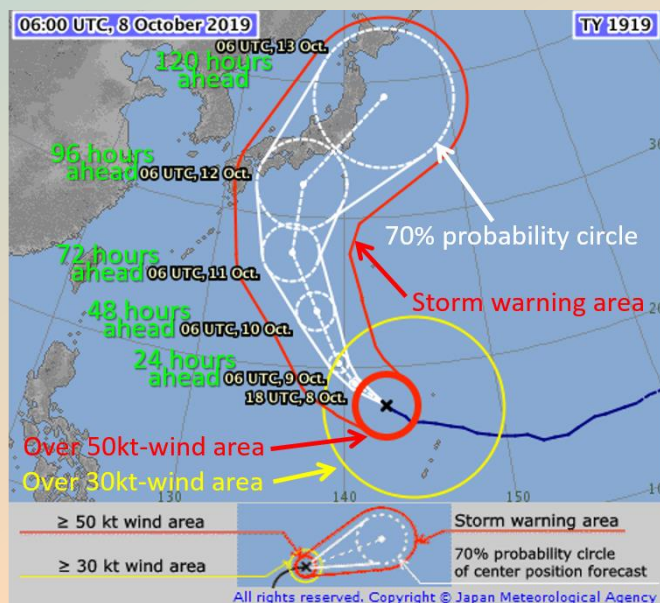


図1 令和元年台風第19号に関する10月8日06UTCの実況と5日先までの予報(一部加筆)

このような責務を果たすためには、刻々と変わる台風の位置・勢力等をいち早く正確に捉え、それに基づいて可能な限り高精度な予測を行う必要があります。台風の監視・解析には、各種衛星観測、地上・海上観測、レーダー観測等、最新の技術に基づく様々な観測データが用いられるとともに、その予報には最新の数値予報技術に基づいた各種予測資料が活用されています。また、台風による災害を軽減するための台風情報の改善は常にもとめられており、それに資する更なる解析・予報精度の向上を目指す必要があります。このため、気象庁では、各種観測データや予測資料を有効に活用して解析・予報精度を高めるための技術開発を継続的に行っています。

講演では、気象庁において現在発表されている台風情報の概要を紹介し、それらを支える解析・予報技術について解説します。更に、各種の技術開発に基づいて最近行われた台風情報の改善について紹介するとともに、今後の課題や展望についても触れる予定です。



永戸久喜 氏近影 および 略歴

京都大学理学部卒業、京都大学大学院理学研究科修了(博士(理学))。気象庁札幌管区気象台技術部技官、気象研究所予報研究部研究官、主任研究官、予報部数値予報課予報官、数値予報班長、数値予報モデル開発推進官、予報課アジア太平洋気象防災センター所長を経て、現在、気象研究所研究調整官。